

## 光吉夏弥旧蔵のロシア絵本について

沼辺 信一（絵本蒐集・研究家）

2004年から05年にかけて、芦屋市立美術博物館を皮切りに全国六都市の美術館を巡回した「幻のロシア絵本 1920-30年代」展【図1】は、戦前のロシア絵本の黄金時代に光を当てた日本初の展覧会として、各地で大きな反響を呼んだ。<sup>（註1）</sup>同展の第一の功績はロシア絵本の目覚ましい成果を詳しく紹介したことにあるが、併せてそれらの絵本が同時代の日本に数多くもたらされ、当時の童画家のみならず、前衛画家・デザイナー・ロシア文学者など多方面から注目され、熱心に受容されていた事実を浮き彫りにした点も見逃せない。



【図1】展覧会カタログ『幻のロシア絵本 1920-30年代』（淡交社、2004年）

この展覧会の趣旨はまず、早くから抽象絵画を実践し、戦後の関西で前衛的な「具体」美術運動を主導した吉原治良（1905～1972）が芦屋の地に遺したロシア絵本87冊を初公開することにあった。吉原は1930年代初頭にモスクワを拠点とする美術団体「四美術」社の影響下で独自の絵本制作を目指したことがあり、その目的で多数の絵本を蒐集したと考えられる。ほぼ同時期に、東京でもグラフィック・デザイナーの原弘（1903～1986）、前衛画家で児童書の挿絵も手がけた柳瀬正夢（1900～1945）も同時代のロシア絵本に注目し、数多くの実例を手元に置いていた。この三人の遺品に含まれるロシア絵本は幸いにも公的機関に収蔵されており、現存するすべてが展覧会

に並べられた。<sup>(註2)</sup>

1932年に東京で「新ニッポン童画会」を結成した<sup>やすたい</sup>安泰（1903～1979）、前島とも（1904～1986）、前島の夫の松山文雄（1902～1982）もロシア絵本に傾倒し、その強い影響下で「今日の児童の現実と常に密着し」「生々とした、活動力に富んだ、児童の生活の積極性に合致した」<sup>(註3)</sup>童画の創出を目指していた。1930年代の絵雑誌『コドモノクニ』には、彼らがロシア絵本に学びながら試行錯誤した痕跡が認められる。<sup>(註4)</sup> 展覧会の時点では行方不明だった松山・前島夫妻の旧蔵ロシア絵本がのちに33冊まとまって発見されたことから、若き童画家たちがどのような絵本を手にしたかも検証が可能になった。<sup>(註5)</sup>

彼らが後世に伝えたロシア絵本は、1930年代初頭にモスクワとレニングラードで刊行されたものが大半を占め（とりわけ1931、32年に集中する）、互いにアイテムの重複も多く、その場合エディション（刊行年と版）まで共通するところから、入手した時期と経路が同一だったと容易に推察できる。1932年に大竹博吉（1890～1958）が創業した「ナウカ社」は、同年5月には東京・神田神保町に店舗を構えてソ連書籍の独占的な輸入・販売を開始し、店頭に多くの絵本を並べていた。戦後の回想で原弘は「ナウカ書店で新着本を見るのがたのしみだった」<sup>(註6)</sup>「私は夢中になって、40冊ほどを買い求めた」<sup>(註7)</sup>と記し、松山文雄も「ちょうどその時期〔1932年頃〕にナウカ社にソ連からたくさんの絵本が入ってきましてね。この影響が大きかったですよ」<sup>(註8)</sup>と証言しており、大竹と親しかった柳瀬正夢の旧蔵絵本、関西在住の吉原治良が入手した絵本群も含め、戦前から伝わるロシア絵本のほとんどがナウカ社経由で日本にもたらされたものと推定できよう。ちなみに、ナウカ社は大竹をはじめ主要な社員が治安維持法違反で逮捕され、1936年8月に閉店・廃業に追い込まれており、これがロシア絵本の日本における流通の下限時期と考えられる。<sup>(註9)</sup>

以上に概観した戦前のロシア絵本移入史を踏まえたうえで、光吉文庫（白百合女子大学児童文化研究センター）に残された光吉夏弥（1904～1989）旧蔵のロシア絵本（全61冊）の内容を分析するとともに、その特質を浮き彫りにするのが本稿の目的である。末尾には絵本全点のリストを附録に加えたので、必要に応じて適宜そちらもご参照いただきたい。

## 光吉夏弥のロシア絵本コレクション——その全体像と特色

光吉文庫に残るロシア絵本は全61冊だが、2点の重複があるので59種を数える。厳密には教材アルバム2冊、子ども向け雑誌と大人向け雑誌各1冊を含むが、いずれも

絵入り冊子なので、ここでは「絵本」と総称する。それらをまず刊行年度ごとに分類してみよう。

総冊数		61冊（59種）
刊年度別	1926-29年	10冊
	1930年	8冊
	1931年	20冊
	1932年	19冊
	1933年	4冊

一見して明らかなように、絵本の刊行年は1930年代初頭の数年に集中しており、1931年と32年の2年間に出了たものが39冊と総数の六割以上を占める。これはやはり戦前から伝わる吉原治良、原弘らのコレクションとよく似た傾向であり、光吉夏弥が彼らと同時期に、同じ経路からロシア絵本を蒐集したことを強く示唆する。とりわけ吉原治良の旧蔵絵本（全87冊）とは互いにラインナップが重なり合い、26冊もの絵本が両者に共通する。しかも、これらはほぼすべてエディション（刊行年と版）まで合致しているのに驚かされる。



【図2】 マルシャーク文、レーベジェフ  
絵『昨日と今日』(1931年/M13188)



【図3】 チュコフスキー文、アンネンコフ  
絵『しっかり洗え』(1933年/M13189)

具体例をいくつか挙げておこう。日常生活の近代化を讃えたマルシャーク文、レーベジェフ絵の『昨日と今日 Вчера и сегодня』(M13188)【図2】と、風呂嫌いの坊やを主役としたチュコフスキー文、アンネンコフ絵の『しっかり洗え Мойдодыр』

(M13189)【図3】は、ともに何度も版を重ねた人気絵本だが、光吉文庫が架蔵するのは前者が1931年刊の第5版、後者は1933年刊の第17版と、吉原治良が旧蔵した絵本とエディションがびたり一致する。さらに、影絵によるクイズ形式の『だあれ? Кто?』(1931年、第2版/M13191)は吉原治良と柳瀬正夢の、飛行船が飛来する日を描いた『ツェッペリン Цепелин』(1931年、第2版/M13231)は吉原治良と原弘の、それぞれ旧蔵絵本とエディションまで同じである。こうした実例は枚挙に暇がなく、光吉の蒐集時期と入手経路もまた、他の人々と共通していたと考えるべきだろう。

光吉旧蔵ロシア絵本をさらに個別的に点検すると、表紙裏の隅に「ナウカ社」もしくは「ナウカ書房」のシールが貼付された例が、上述の『昨日と今日』【図4】など全8冊あった(M13182/M13188/M13197/M13198/M13209/M13210/M13220/M13228)。いずれも1931年もしくは1932年の刊行であり、1932年5月の開店後ほどなく神田神保町のナウカ社の店頭に並べられたものと推察される。<sup>(註10)</sup>



【図4】『昨日と今日』(M13188)に貼られた「ナウカ社」シール

光吉夏弥は1930年から鉄道省の外局「国際観光局」に勤務し、1935年創刊の英文によるグラフ雑誌『トラヴェル・イン・ジャパン Travel in Japan』の編集を担当した。その準備段階でグラフィック・デザイナーの原弘と知り合い、公私にわたる密接な交友関係をもつに至った。先述したように、原はナウカ社で数多くのロシア絵本を目にしてその魅力に開眼していたから、光吉も彼の感化によってロシア絵本の蒐集を開始したと想像したくなる。澤田精一は評伝『光吉夏弥 戦後絵本の源流』(岩波書店、2021年)で、「光吉は原の影響でロシア絵本の収集を始めます」<sup>(註11)</sup>と明言しているが、実のところそう断定できる証拠があるわけではない。1904年に生まれた光吉夏弥は、年齢的に吉原治良(1905年生まれ)、原弘(1903年生まれ)、松山文雄(1902年生まれ)、柳瀬正夢(1900年生まれ)らと同世代であり、感受性に恵まれた当時30歳前後の青年たちがそれぞれ別箇にロシア絵本の独自性に気づいたとしても、一向に不

思議はないのである。<sup>(註12)</sup>

光吉夏弥についての研究は近年、上述の澤田氏による評伝を筆頭に、生駒幸子氏、遠藤知恵子氏らの地道な努力で急速な進展を遂げているが、その生涯は今なお多くの謎に包まれたままである。1920年代に舞踊評論の分野で名を成した光吉がいかなる契機から児童書に興味を抱き、いつ海外絵本の蒐集を開始したか、いまだに判然としないのである。もしも彼が（ナウカ社の存続時期である）1932年から1936年の間にロシア絵本の蒐集に手を染めていたとするなら、それは一時的で気紛れな関心ではありえず、その時点ですでにアメリカを中心とする同時代絵本の系統だったコレクション形成が始まっており、その蒐書活動の一環として、ロシア絵本の購入がなされたと考えるのが自然だろう。

### 思いがけない入手経路——1920年代の稀少な絵本群

光吉文庫が収蔵するロシア絵本のうち、1930年代（1930年から1933年まで）の刊行分51冊については、シール貼付の有無に関わらず、大部分がナウカ社の手で輸入・販売されたものと断定できそうだ。すでに述べたように、同時期に他の日本人が蒐集した絵本の実例とのエディション照合によって、そのあたりの事情はほぼ明らかなのである。



【図5】 マルシャーク文、パホーモフ絵『こわし名人』（1930年/M13175）



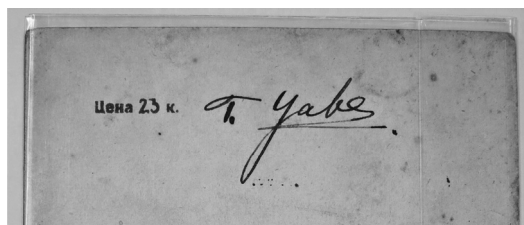
【図6】『こわし名人』の裏表紙に記された署名“Т. Терасима”

ただし1点だけ例外がある。大工仕事の真似事に勤しむ少年を主人公としたマルシャーク文、パホーモフ絵の人気絵本『こわし名人 Мастер-ломастер』(M13175)【図5】がそれだ。ナウカ社によって相当数が輸入されたと思われ、複数の残存例が確認でき、吉原治良と原弘の旧蔵絵本中にもこの絵本が見出される。ただし、正規ルートで到来したのは1931年刊の第2版であり、光吉旧蔵本だけが1930年の初版なのである。さらに仔細に点検すると、この初版本には裏表紙にペン書きで“Т. Тerasима”と判読できるキリル文字【図6】が記されている。同様の書き込みは、ほかにもヴェブリツカヤ詩、コナシェーヴィチ絵による絵本『歌 Песенки』(1929年/M13221)の裏表紙、黒と褐色の二色刷りの動物絵本『虫 Жучки』(1928年/M13227)の裏表紙にもなされており、これら3冊の絵本は通常のナウカ社ルートを辿らず、「テラシマ」なる旧蔵者の手を経て光吉コレクションに加わったものと推察される。

この「テラシマ」とはおそらく、プロレタリア画家として活躍した寺島貞志<sup>てらしまていし</sup>(1905～1983)であろう。1920年代中頃に急進的な美術集団「造型」(若き原弘もメンバーだった)に加わったのち、1929年と30年にそれぞれ短期間モスクワで学んだのを機に、写実的な社会主義リアリズムへと作風を転じた。<sup>(註13)</sup> 絵本の刊行年がそれぞれ1928、29、30年である点も、裏表紙に書き込まれたキリル文字のサインも、これら3冊が二度にわたるモスクワ滞在時に寺島の手で蒐集された絵本であることを強く示唆する。寺島と光吉との直接の交友は知られていないが、寺島には広告美術に手を染めた一時期があり、また原弘という共通の知己もいたところから、彼がモスクワで入手した絵本がなんらかの伝手で光吉コレクションに加わったものと考えられる。



【図7】 フローマン文、フォクト絵『鉄』(1926年/M13192)



【図8】『鉄』の裏表紙に記された署名“T. Yabe”

ほかにも特異な入手ルートが判明する絵本がある。鉄の採掘から精錬までを紹介した知識絵本『鉄 Железо』（1926年/M13192）【図7】はいかにも地味な1冊だが、裏表紙にペン書きサイン“T. Yabe”【図8】があるところから、前衛画家・プロレタリア画家の矢部友衛<sup>やべともえ</sup>（1892～1981）の旧蔵本と推定できる。矢部もまた1926～27年に訪ソしてモスクワに長期滞在し、帰国後に東京ほかでソ連美術を展覧する大規模な美術展「新ロシヤ展」を実現させた功績で知られる。<sup>(註14)</sup> 矢部と光吉の接点の有無についても不明だが、寺島の場合と同様に、光吉は心当たりの人物に接触しては、ロシア絵本の蒐集に努めたことがわかる。

淡水魚の生態を扱った絵本『ヨールシ Ерш』（1926年/M13202）もまた、刊行年が古いためナウカ社の正規ルートでは輸入されなかった書目であり、裏表紙に赤鉛筆で旧蔵者名（?）「染谷」と記入されていて、やはり何らかの特殊な入手経路が想定される。このほか、記名などの痕跡はないものの、チュコフスキー文、ルダコーフ絵によるドリトル先生の翻案絵本『電話 Телефон』（1926年/M13172）も、わが国では遺例がほかに見当たらず、やはり1920年代にソ連を訪れた人物が持ち帰った稀少な逸品だろうと思われる。



【図9】レイフェルト&メクシン文、モギレフスキー絵  
『長い名前』（1929年/M13201）



【図10】レイフェルト&メクシン文、シュテレンベルグ絵  
『阿呆者の国』（1929年/M13184）

さらに興味深いのは、日本の民話に取材した珍しい絵本の存在である。モギレフスキー絵による『長い名前 Длинное имя』（1929年/M13201）【図9】とシュテレンベルグ絵による『阿呆者の国 Страна дураков』（1929年/M13184）【図10】がそれである。これらは東京に住んだ経験もある日本学者アンドレイ・レイフェルトが再話し、児童文学

者ヤコフ・メクシンが修辭を整えた3冊の日本民話絵本のうちの2冊である。<sup>(註15)</sup> 光吉は東洋を舞台に欧米人が著した物語や絵本に一貫して強い関心を抱いており（『ちびくろ・さんぼ』『支那の墨』『九月姫とウグイス』など）、これらロシア人による日本表象にも並々ならぬ好奇の目を向けたことは想像に難くない。この2冊もまた刊行年代が早かったためナウカ社の輸入書目に含まれず、光吉文庫以外では遺例が見当たらない。いかにも光吉の面目躍如たる蒐集品といえるだろう。なお、これら2冊の日本民話絵本に、アフリカを舞台にした異色絵本『ガルとムガトゥ：黒人の子どもたち Галу и М'гагу: Негритянские ребята』（1930年/M13214）を加えた3冊にはどれも絵本の上辺に画鋏の痕があり、なんらかの展示に供されたのち光吉コレクションに加わった可能性もある。

以上にやや詳しく考察したように、光吉はナウカ社を介した通常ルートでの入手では飽き足らず、より刊行年度の古い稀少な絵本まで手広く蒐集すべく、八方手を尽くして多くの人物に接触し、コレクションの充実に努めたと想像される。光吉文庫に1920年代（1926年から29年まで）のロシア絵本が10冊も含まれるのは、そうした不断の努力の賜物であり、同時代の他の日本人の旧蔵コレクションとは大いに性格を異にする。いずれ後述するが、これら別ルートでの蒐集もナウカ社での購入と並行して同時期になされたとみられ、1930年代末には今日あるようなロシア絵本コレクションがほぼ完成していたと考えられる。

## 1943年の論考「絵本の世界」の先見性

月刊誌『生活美術』（アトリエ社）1943年9月号【図11】は、雑誌の大部分を費やして本格的な「絵本特輯」を組んだ。太平洋戦争のただなかで美術雑誌が初めて絵本を特集した背景には、緊迫する戦況に応じて少国民の教化育成を喫緊の課題と捉える機運があったはずだが、意外にも誌面ではあからさまに好戦的な論調はむしろ抑えられ、言論統制下の社会によりよい絵本を送り出すための実践的な指針を示そうという姿勢が前面に出ている。

この「絵本特輯」の中ほど（48ページと49ページの間）には、欧米の絵本を図版で例示した上質紙の色刷り2ページと「外国の絵本」なる別丁8ページが綴じ込まれ、これを前後から挟み込む形で光吉夏弥の論考「絵本の世界」全6ページが掲載された。どこにも明記されていないが、別丁ページに掲載された海外絵本がすべて光吉の提供になるのは、同じ絵本が光吉論考にも言及されるところから確実であろう。この論考「絵本の世界」こそは、当時の光吉がすでに夥しい実例を手元に置き、絵本と



【図11】雑誌『生活美術』1943年9月号

いうジャンル全体に通暁していた事実をはっきり示すものだ。彼は絵本の多様な可能性を認識しており、刷色の数や判型による用途の違い、物語展開に欠かせない作画上の約束事（彼は「コンティニュイティ」と呼ぶ）<sup>(註16)</sup>にまで言及する。光吉以前にわが国でこのように明確な意識をもって絵本を論じた者は一人もおらず、時代をはるかに超えた先進性が明らかである。

このような知見を光吉がいつどのように育んだかは、それ以前に絵本に触れた文章がないため判然としないが、前年の1942年に彼はアイネス・ホーガン作・絵の『フタゴノ象ノ子』、ムンロー・リーフ作、ロバート・ロウソン絵の『花と牛』の2冊の絵本、さらに中国に取材したクルト・ヴィーゼ作・絵による童話『支那の墨』を翻訳刊行しており（すべて筑摩書房）、<sup>(註17)</sup>この時点でアメリカの絵本や児童文学に親炙していたのは明らかだ。こうした見識は一朝一夕に得られるはずもなく、「絵本の世界」で言及されたアメリカ絵本——アリス・ホワード（ハワード）作『チンリと龍 Ching-Li and the Dragons』（1931年）、マージョリー・フラック作の『おたまじやくしと大蛙 Tim Tadpole and the Great Bullfrog』（1934年）と『大空高く Up in the Air』（1935年）、トオマス・ハンドフォース作・絵『美しい新年 Mei Li』（1938年）など——の刊行年が1930年代全般に及ぶところから、彼はこの期間を費やして着実な理解を深めていったものと想像される。

とりわけ、ムンロー・リーフとロバート・ロウソンの『フェルヂナンドの話（=はなのすきなうし）』（1936年）、ポガニイ夫妻の『金鶏（=金のニワトリ）』（1938年）、ムンロー・リーフの『フェイヤ・プレイ（=みんなの世界）』（1939年）のように、戦

後になって光吉が刊行に尽力した絵本シリーズ「岩波の子どもの本」の収録書目が「絵本の世界」でいち早く紹介されているところに、その驚くべき慧眼と一貫性が看取されよう。

「外国の絵本」ページには、ほかにフランスのジャン・ド・ブリュノフ『ババール Histoire de Babar, le petit éléphant』（1931年）、ドイツのフリードリッヒ・ベエル『三少年都会を探検する Drei Jungen erforschen eine Stadt』（1933年）、イギリスのリチャード・ロビノウ『郵便局のピーター Peter in the Post Office』（1934年）などの図版も載ったが、アメリカ絵本の占める比重が目立って大きいのは否めない。<sup>(註18)</sup> 山本五十六の戦死（1943年4月）、アッツ島玉砕（同年5月）を経て、9月刊行の雑誌で敵国アメリカへの過度の礼讃は憚られたのか、光吉は米国在住の絵本作家の国籍表示に手心を加え、クルト・ヴィーゼをドイツ、ドオレイヤ（ドーレア）夫妻をノルウェー、ボリス・アルツイバーシェフをロシア、ポガニイ夫妻をハンガリーとそれぞれ記すことで、予想される非難を緩和しようと配慮した。

## 「絵本特輯」に掲載されたロシア絵本

確たる理念もないまま濫造されるわが国の絵本の現状を憂いて、「本当の進展はこれから」<sup>(註19)</sup>との立場から論考「絵本の世界」を構想した光吉は、もっぱら先進国アメリカでの実例を引きながら具体的に話を進めるが、終盤に近づいたところで俄かに方向を転じ、「五カ年計画」当時、すなわち1930年代初頭にソ連で大量に刊行された絵本群を話題にする。ここでその論旨の検討に入る前に、雑誌『生活美術』の「絵本特輯」でいかなるロシア絵本が図版に掲げられたかを確認しておきたい。

まず別丁の色刷りページには、エフ・フオルマン、ヴェ・ボニユク作の『育ち行く頃』なる絵本（表紙）が掲載された（以下、作者名・題名は誤記も含め記載のまま）。1930年代初頭の先駆的な写真絵本として興味深い1冊である。

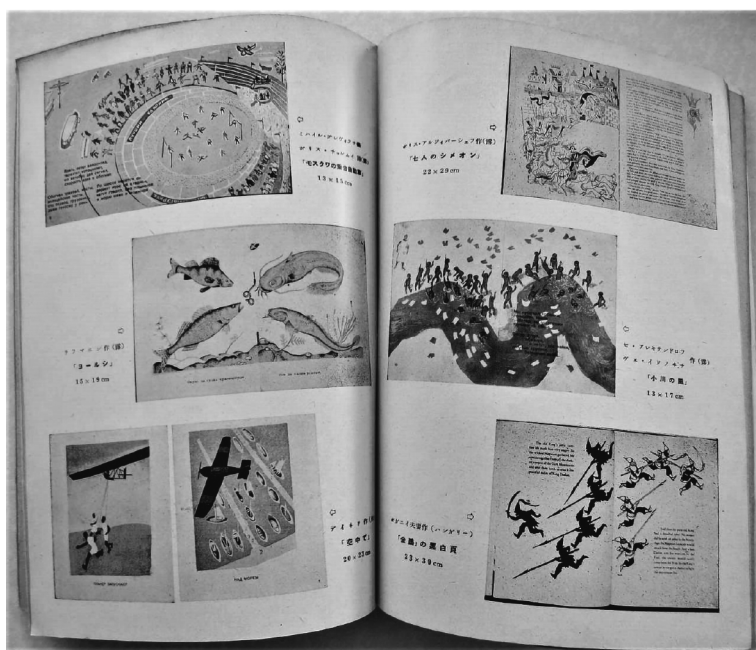
次いで、「外国の絵本」なる図版ページ【図12】では、以下の4冊のロシア絵本がそれぞれ見開きの状態で例示された。

ゼ・アレキサンドロフ、ヴェ・イワノキチ作『小川の風』

ミハイル・グレヴィツチ画、ボリス・チョルムイ詩『モスクワの乗合自動車』

ラフマニン作『ヨールシ』

ダイネク作『空中で』



【図12】『生活美術』絵本特輯より「外国の絵本」（ページ見開き）

❖ロシア絵本4冊の図版を掲載。右ページに『小川の風』（中段）、左ページに『モスクワの乗合自動車』『ヨールシ』『空中で』。

はっきりタイトルと作者名が明示されたロシア絵本は以上の5冊のみだが、このほか光吉の論考「絵本の世界」掲載ページ【図13】にはさらに4冊の絵本（見開き）が挿図として掲げられ（50～51ページ）、キャプションを欠くものの、図柄からすべてロシア絵本と比定される。さらに当時の読者は知る由もなかったが、この絵本特集に画家の北川民次が寄せた「絵本の材料と印刷技術」なる論考中に、キャプション抜きで文章とは無関係に図版が載った2冊（見開き）もやはりロシア絵本であり（27、29ページ）、そのほか特集外のコラム記事に埋め草として載った図版も、ロシア絵本の表紙である（72ページ）。

これらのロシア絵本について、掲載ページ順に原タイトルと刊行年を列記してみよう。併せて、光吉文庫に同じ絵本が残るものには「現存」と追記した。

27ページ：北川民次「絵本の材料と印刷技術」の挿図

Зимой и летом（冬と夏）1931年 \*現存／光吉文庫（M13220）

29ページ：北川民次「絵本の材料と印刷技術」の挿図



【図13】『生活美術』絵本特輯より 光吉夏弥「絵本の世界」見開き（50～51ページ） ロシア絵本4冊をキャプションなしで掲載。

- Болотные птицы（沼の鳥）1931年 \* 現存／光吉文庫（M13217）  
色刷り図版ページ
- Пора вставать（起床時）1932年 \* 掲載タイトルは「育ち行く頃」  
「外国の絵本」図版ページ
- Ветер на речке（小川の風）1932年
- Автобус Москва（モスクワの乗合バス）1931年 \* 現存／光吉文庫（M13232）
- Ерш（ヨールシ）1926年 \* 現存／光吉文庫（M13202）
- В облаках（雲のなかで）1930年 \* 現存／光吉文庫（M13225）
- 50ページ：光吉夏弥「絵本の世界」の挿図
- Телефон（電話）1926年（第2版）\* 現存／光吉文庫（M13172）
- Багаж（荷物）1931年（第6版）
- Автобус Москва（モスクワの乗合バス）1931年 \* 現存／光吉文庫（M13232）
- 51ページ：光吉夏弥「絵本の世界」の挿図
- Почтальон стучится в дверь（郵便屋さんがドアをたたく）1932年
- 72ページ：コラム「時の話題」の挿図
- Путешествие в Батум（バトゥームへの旅）1931年 \* 現存／光吉文庫（M13212）

ご覧のとおり、そう明示されないものも含め、計11冊ものロシア絵本の図版が掲載されたことがわかる。絵本の選定基準は一見して脈絡を欠くが、生態観察に基づく動物絵本（『冬と夏』『沼の鳥』『ヨールシ』）やソ連社会の現実に題材を得たもの（『モスクワの乗合バス』『郵便屋さんがドアをたたく』『バトゥームへの旅』）、子どもたちの姿を瑞々しく描いたもの（『小川の風』『雲のなかで』）が選ばれており、刊行時には新機軸だった写真絵本『起床時』や、愉快的韻文詩によるコルネイ・チュコフスキー作『電話』、サムイル・マルシャーク作『荷物』も加わっている。

図版が掲載されたロシア絵本がすべて当時の光吉コレクションから選ばれているのは他の欧米絵本の場合と同様であり、それは光吉文庫の蔵書との照合からも明らかだろう。ただし、11冊のうちで現存するのは7冊に限られ、残存率はおよそ64%である。光吉は第二次大戦で空襲に遭っており、<sup>(註20)</sup>その際ロシア絵本も部分的に失われたと仮定すると、61冊が伝わる光吉のロシア絵本も、当初は100冊前後の大きなまとまりを形成していたと推定されよう。これは現存する吉原治良の87冊をも上回り、戦前の日本では最大級のロシア絵本コレクションだったはずだ。

もうひとつ注目したいのは、掲載されたロシア絵本のなかに1926年の刊行になる2冊、『ヨールシ』と『電話』が含まれている点である。上述したとおり、これらは1930年代にナウカ社が輸入・販売したものではあり得ず、何者かの手でソ連から持ち帰られた絵本だと考えられる。論考「絵本の世界」が執筆された1943年の時点で、光吉はこうした特殊ルートを経由した絵本も入手しており、幅広い刊行年代からなる現在のロシア絵本コレクションをすでに完成していた。おそらく1930年代末には蒐集を終えていたのではなかろうか。

## 1943年の論考にみる光吉のロシア絵本理解

このように潤沢な事例を手元に置いたうえで、光吉夏弥は1943年の論考「絵本の世界」の末尾でロシア絵本に言及する。彼は「絵本の主題と、その扱い方が、時代と共にどんどん進み、拡がりをもつていく」「最近の絵本の世界を広く豊かにした一番大きなものは、教へる絵本の進歩であつた」<sup>(註21)</sup>と前置きして、欧米に登場した新趣向の動物絵本や科学写真絵本、漫画スタイルの導入例をいくつか紹介したのち、不意に話題を転じて1930年代初頭のロシア絵本の勃興について概説総括する。長い引用を厭わず、その全文をここに書き写してみよう（文中の旧漢字を改め、「ソ聯」は「ソ連」とした）。

絵本のもつ教へ知らせる要素、啓発宣伝的な効用は、今日の如き時局下で一層高く発揚されることが必要であらうか、それについて想ひ起されるのは、五ヶ年計画当時、ソ連でとられた盛大な絵本政策である。

あそこ出た、粗末な紙に刷られた薄い簡単な絵本、ちやうど去年日本で出た四銭絵本と同形式の、しかし質的にはずっと高かったソ連絵本は、短い期間に何百種、何千万部といふ大量を、どつと流し出した劃期的な生産の旺盛さで、世界を驚かしたものであつたが、それらはすべてただ一つの目的——子供ばかりでなく、おともも含めてのソ連全大衆の啓発のためになされたのであつた。

新しい道路の建設が叫ばれると、それに平行した道路についての絵本が大部数で刊行され、トルクシンプ鉄道が敷かれることになると、シベリヤとトルキスタンを結ぶこの鉄道のソ連経済への意義と、建設工事の實際が絵本で解説され、ドニエプロストロイ・ダムの完成に当つては、技術の近代的凱歌が謳歌されるといった具合で、絵本が今の日本の週報的役割をもつたのであつた。

しかもそれは絵本であるために、もつと低い年齢層へまでの浸透度を持つたのであるが、かうした時事的な主題ばかりでなく、新聞の出来るまでとか、集団農法のありかたとか、ソ連の自然資源とか電化計画と石炭の増産の関係とかの、凡ゆる知識的なものについての絵本が、ふんだんに提供されたのである。

街の辻々の新聞売場は、赤やら青の絵本の氾濫で、文字とほり絵本の市に変貌したといはれてゐるくらゐだが、遠いシベリヤの果てから中央アジアの僻村まで、ソ連全土に洪水のやうに普及されたのである。

そしてこれらの絵本の製作には、インテリはじめとするソ連一流の作家と画家が動員され、出版配給はすべて国立出版社のゴシスダートの手でなされたが、原稿料は刊行前、特別の絵本委員会の審査にかけられ、出た絵本は子供にそれがどう迎へられたか、宣伝啓発の役を十分に果したかどうかを、全国の学校と図書館で調査する慎重な方法がとられたのである。

絵本がこのやうに盛大な国家目的への動員を持つたことはかつてないことであり、絵本出版がこれだけ計画的になされたことも他に例をみないことであるが、しかもそれがいはゆる計画絵本にありがちな生硬平板なものに墮することなく、絵本本来の魅力を本質的に持つたものであつたことは記憶されなければならない。

一九三〇年にウインで「ソ連絵本展」が開かれたとき、十万をこえるオーストリア児童が毎日熱狂をもつてつめかけたことにも見られるやうに、それらはソ連国外の児童にも訴へるだけの絵本本来の魅力を持つてゐたのである。<sup>(註22)</sup>

これを一読して、ロシア絵本の本質を端的に言い当てる洞察力に誰しも目を瞠るだろう。国家主導で出版され、安価で簡便な装丁により大量に頒布されたこと、知識を与え、教え導く絵本が主流をなすこと、など、ロシア絵本の特性が明快に述べられており、「それらはすべてただ一つの目的——子供ばかりでなく、おともも含めてのソ連全大衆の啓発のためになされた」「凡ゆる知識的なものについての絵本が、ふんだんに提供された」「いはゆる計画絵本にありがちな生硬平板なものに堕することなく、絵本本来の魅力を本質的に持ったものであつた」など、光吉が繰り出す指摘はいちいち的確で正鵠を射ていて、今日でもそのまま通用するあたりには感嘆を禁じ得ない。1930年代のロシア絵本の隆盛から10年を経て、その魅力のありかと出版活動の概略をこのように総括する光吉の知見と眼力の鋭さはまさしく比類のないものだ。しかもこうした評言が、欧米の同時代絵本に通暁した当代随一の「目利き」の口から出たところに、千金の重みが実感される。

それにしても、この秀逸な絵本論の締めくくりに、光吉はなぜ、よりによって10年前のロシア絵本的话题を導入したのだろうか。今となつては解き得ない謎というほかないが、もしかすると彼は、ここにソ連の実例を挙げることで記述のバランスをとり、アメリカ絵本的话题ばかりが頻出する弊を避けたかったのかもしれない。<sup>(註23)</sup>

もうひとつ考え得る説明としては、国家総動員体制のもとで戦況が厳しさを増し、児童書出版が完全に政府の統制下に組み込まれたこの非常時に、五カ年計画期のソ連が国策として推進した「計画絵本」こそ範と仰ぐべきだと光吉は信じたという解釈だ(彼は翼賛体制下で「日本少国民文化協会」幹事の要職にあつた)。冒頭で「絵本のもつ教へ知らせる要素、啓発宣伝的な効用は、今日の如き時局下で一層高く発揚されることが必要であらうか」と前置きするのが何よりの証となろう。さらに文中で「ちやうど去年日本で出た四銭絵本」と、1942年に生活社から矢継ぎ早に刊行された小型の創作絵本シリーズ<sup>(註24)</sup>が暗に引き合いに出されるのも、そうしたアクチュアルな問題意識の現れではないか。

光吉は機関誌『少国民文化』1944年5月号に寄せた「大東亜少国民文化の建設(承前)」なる文章で、自らも関与する対外文化工作についてこう記す。

児童向きの展覧会も、絵画展、工作展、発明展など、絶えず巡回的に開かれてよいものであらう。さうしたものの一つとして、僕は日本の絵本展を、まづ自分の関係するタイ国への文化工作のひとつとしてやつてみたいと考へてゐる。かつてソ聯が巴里やウィーンで開いた絵本展の大きな成功にみても、これはきつと輝かしい成果をあげられるであらう。あの当時のソ聯の絵本は今の日本の絵本のやうに立派でなかつたし第一、露文の絵本の文字は、巴里の子供もウィーンの子供も

読めなかつた筈である。それでもあの成功を獲ち得たのであり、日本の絵本の場合は、タイの子供たちも読みうるのであるから、一層悦ばしい成果を期待してよいであらう。<sup>(註25)</sup>

1943年9月の「絵本の世界」で紹介されたウィーンでのロシア絵本展の話題がここでも蒸し返されている。占領地域での日本絵本展の開催など、今日の視点からすると許しがたい文化侵略の暴論ながら、戦時下にあつて光吉は真剣に実現性を模索したのだろう。ロシア絵本に注がれる熱い視線は、非常時ならではの喫緊の要請と結びついていたのだ。

## 光吉のロシア絵本論における「種本」の存在

さて「絵本の世界」で披瀝された光吉のロシア絵本論には、その卓越した内容とは別に、論考の他の部分とは異なる特色が認められる。彼はここに至るまで欧米（主としてアメリカ）絵本の具体例をそのつど明示しながら、抽象的な空論に陥らぬよう努めてきたのだが、ロシア絵本論では一転して個別的な作者名や書名はひとつも記されない。その一方で「シベリヤとトルキスタンを結ぶ」トルクシブ鉄道工事や「ドニエプロストロイ・ダムの完成」を扱った絵本、「新聞の出来るまでとか、集団農法のありかたとか、ソ連の自然資源とか電化計画と石炭の増産の関係とかの、凡ゆる知識的なものについての絵本」に言及されるのだが、たいそう奇妙なことに、それらに該当する絵本の図版がどこにも掲げられていない。光吉文庫に残されたロシア絵本61冊を探っても、そのような実例はほとんど見出されない。いかにも不可解な現象というべきだろう。

結論から先に記してしまうと、光吉のロシア絵本論には執筆の際に依拠した英語の論考が存在し、その文中で挙げられた絵本の実例をそっくりそのまま引き写したのである。彼が参照したのは、アーネステイン・エヴァンズ（Ernestine Evans）なる女性ジャーナリストが書いた“Russian Children and Their Books”という紹介記事【図15】で、アメリカの月刊グラフ雑誌『アジア Asia』の1931年11月号【図14】に載ったものだ。<sup>(註26)</sup>この英文記事は周到な取材に基づき、得られたロシア絵本についての最新情報を手堅くまとめた読み応えある考察である。そこには光吉が例として挙げたトルクシブ鉄道やドニエプロストロイ・ダム（ウクライナ）についての絵本、新聞ができるまでの絵本、電化計画と石炭増産の関係を示した絵本が文中で紹介されており、国立出版社（Госиздат）での絵本の製作過程や出版後の反響調査も、ウィーンで

の「ソ連絵本展」に大勢の子どもたちが押しかけた挿話も、すべてこの『アジア』誌の記事が情報源になっている。ここで光吉の文章を再掲し、エヴァンズ論考と記述内容が重複する箇所には下線を施してみよう。

絵本のもつ教へ知らせる要素、啓発宣伝的な効用は、今日の如き時局下で一層高く発揚されることが必要であらうか、それについて想ひ起されるのは、五ヶ年計画当時、ソ連でとられた盛大な絵本政策である。

あのことろ出た、粗末な紙に刷られた薄い簡単な絵本、ちやうど去年日本で出た四銭絵本と同形式の、しかし質的にはずっと高かつたソ連絵本は、短い期間に何百種、何千万部といふ大量を、どつと流し出した劃期的な生産の旺盛さで、世界を驚かしたものであつたが、それらはすべてただ一つの目的——子供ばかりでなく、おともも含めてのソ連全大衆の啓発のためになされたのであつた。

新しい道路の建設が叫ばれると、それに平行した道路についての絵本が大部数で刊行され、トルクシンプ鉄道が敷かれることになると、シベリヤとトルキスタンを結ぶこの鉄道のソ連経済への意義と、建設工事の実際が絵本で解説され、ドニエプロストロイ・ダムの完成に当つては、技術の近代的凱歌が謳歌されるといった具合で、絵本が今の日本の週報的役割をもつたのであつた。

しかもそれは絵本であるために、もつと低い年齢層へまでの浸透度を持つたのであるが、かうした時事的な主題ばかりでなく、新聞の出来るまでとか、集団農法のありかたとか、ソ連の自然資源とか電化計画と石炭の増産の関係とかの、凡ゆる知識的なものについての絵本が、ふんだんに提供されたのである。

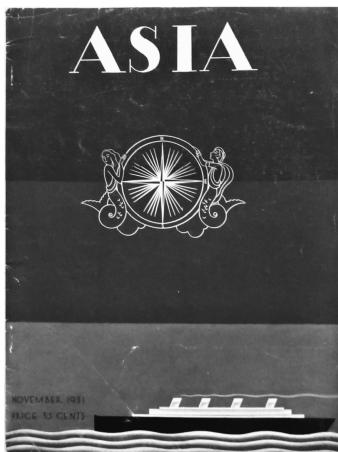
街の辻々の新聞売場は、赤やら青の絵本の氾濫で、文字とほり絵本の市に変貌したといはれてゐるくらゐだが、遠いシベリヤの果てから中央アジアの僻村まで、ソ連全土に洪水のやうに普及されたのである。

そしてこれらの絵本の製作には、インテリはじめとするソ連一流の作家と画家が動員され、出版配給はすべて国立出版社のゴシスダートの手でなされたが、原稿料は刊行前、特別の絵本委員会の審査にかけられ、出た絵本は子供にそれがどう迎へられたか、宣伝啓発の役を十分に果したかどうかを、全国の学校と図書館で調査する慎重な方法がとられたのである。

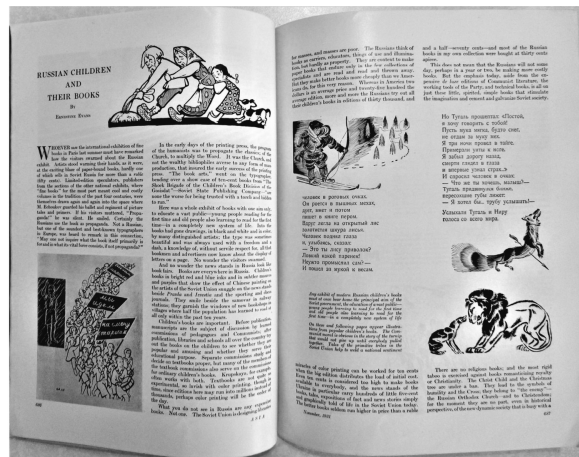
絵本がこのやうに盛大な国家目的への動員を持つたことはかつてないことであり、絵本出版がこれだけ計画的になされたことも他に例をみないことであるが、しかもそれがいはゆる計画絵本にありがちな生硬平板なものに堕することなく、絵本本来の魅力を本質的に持つたものであつたことは記憶されなければならない。

一九三〇年にウインで「ソ連絵本展」が開かれたとき、十万をこえるオーストリア児童が毎日熱狂をもつてつめかけたことにも見られるやうに、それらはソ連国外の児童にも訴へるだけの絵本本来の魅力を持つてゐたのである。

ご覧のように、ほぼすべての情報がエヴァンズの記事に由来し、光吉がそれに沿って論を進めているのは明らかである。手元で100冊前後のロシア絵本が参照できたにもかかわらず、それらには言及せず、もっぱら英語文献に頼りきっている姿は奇妙で不甲斐なくもあるが、これが彼の流儀だったのだろう。光吉は1920年代から舞踊評論で一家をなしていたが、外国体験をもたない彼は海外文献を手広く渉猟することで自らの実見体験の乏しさを補っており、<sup>(註27)</sup>いつしかそれが習性となっていたとも考えられる。



【図14】雑誌『アジア Asia』  
1931年11月号（表紙）



【図15】同誌に掲載されたエヴァンズの記事  
“Russian Children and Their Books”

この紹介記事が掲載されたアメリカの月刊誌『アジア』は、民族・風土・文化などアジアに関する情報を満載した1917年創刊のグラフ雑誌で、巻末には旅行会社やホテルの広告も載って、旅行ガイドの性格をも併せもっていた。光吉が1930年から勤務した国際観光局に同誌が届いていた可能性はきわめて高く、この1931年11月号を彼はほぼリアルタイムで目にしていたとも推察されよう。ひょっとして、彼はこのエヴァンズの記事でロシア絵本の存在を初めて知って興味をかきたてられ、翌32年5月に開業した神保町のナウカ社に赴いたのではなかろうか。必ずしも原弘からの感化に拠らずとも道は拓けたのだ。

何はともあれ、1943年9月の段階で光吉夏弥が数多くのロシア絵本を手元に置きな

がら、それらの特質と歴史的意義を論じた事実はきわめて重要である。しかもその際に参照された絵本の現物の多くが散逸を免れて光吉文庫に残された意義は計り知れない。戦前にロシア絵本の価値に気づき、いち早く論じた者はほかにもいるが、<sup>(註28)</sup> コレクションの現物と論述の両方が残されているのは、光吉ただ一人であることを忘れてはならない。

## エピローグ：「岩波の子どもの本」発刊とロシア絵本

長かった戦争が終わり、混乱と復興の一時期が過ぎると、光吉夏弥の海外絵本への造詣と潤沢なコレクションの出番がようやく巡ってくる。1953年秋、石井桃子の強い慫慂により、同年末に創刊される岩波書店の絵本シリーズ「岩波の子どもの本」企画編集への参画が決まり、光吉の身边は俄かに多忙を極めた。彼はただちに編集会議を招集し、絵本のラインナップの選定基準、共通フォーマットやページ数、対象年齢などを決定した。<sup>(註29)</sup> シリーズの装丁を原弘に委ねたのも、戦前から親しかった光吉の推薦と仲介による。

「岩波の子どもの本」は翻訳絵本を中心に、戦後のわが国の児童書の進むべき道を示した劃期的なシリーズとして定評があり、すでに生駒幸子氏の詳しい研究がある。<sup>(註30)</sup>

その歴史的意義については多言を要すまいが、光吉と石井が協働して翻訳編集に携わった「第一期」刊行分（1953年12月、1954年4月、9月、12月刊）の大部分——『みんなの世界』『ひとまねこざる』『九月姫とウグイス』（以上は光吉訳）や『ちいさいうち』『こねこのぴっち』（以上は石井訳）など——が、刊行から70年近くを経た今日も現役で版を重ねている事実からも、選ばれた絵本の時代を超えた普遍性と編集の高い完成度が察しられよう。【図16】

絵本の選定にあたっては光吉の意見が常に尊重され、彼が秘蔵してきた貴重な絵本が原本として惜しげもなく提供された。「岩波の子どもの本」には、光吉が戦時下で翻訳刊行した2冊の絵本『フタゴノ象ノ子』と『花と牛』が、それぞれ装いも新たに『まいごのふたご』（石井訳）、『はなのすきなうし』（光吉訳）として再登場しており、絵本に対する光吉の嗜好と審美眼が戦後まで一貫していたことを如実に示す。

「岩波の子どもの本」第一期分24冊には、英米の定評ある傑作のほか、日本民話による創作、ドイツ（『どうぶつ会議』）やスイス（『アルプスのきょうだい』『こねこのぴっち』）の絵本まで含まれるが、ソ連からは『どうぶつのこどもたち』【図17】が選ばれている。戦前からロシア絵本を熱心に蒐集し、1943年の絵本論でその成果を絶賛した光吉のことだから、この『どうぶつのこどもたち』選定には深く関与したと思い

たいところだが、どうやら事実はそうでなかった。絵本の原本はロシア語に通じた女性作家の網野菊<sup>あみのきく</sup>から提供されたといい、なぜか光吉の潤沢なロシア絵本コレクションからは選ばれなかった。のちの光吉の回想でも、その製作過程を「毎日新聞の元モスクワ特派員の渡辺善一郎さんに訳してもらい、それをさらに石井さんが練った」<sup>(註31)</sup>と、まるで他人事のように記すばかり。かつてのロシア絵本への熱狂ぶりとは対照的に、あまりに冷淡な態度には驚かずにいられない。



【図16】「岩波の子どもの本」第一期より 光吉夏弥が訳した数冊の絵本



【図17】『どうぶつのこどもたち』（「岩波の子どもの本」1954年）

『どうぶつのこどもたち』はサムイル・マルシャークの詩に絵を添えた『おりのなかのこども Детки в клетке』（エヴゲーニー・チャルーシン絵）、『めんどりと十ぱのあひるのこ Курочка ряба и десять утят』、『はかなこねずみ Сказка о глупом мышонке』（ともにウラジーミル・レーベジェフ絵）の3冊の動物絵本を合本したもののだが、いずれも戦後の1953年にモスクワで出版を底本とする。したがって、画風はおしなべて穏健な写実主義によるもので、1920～30年代の創意と躍動感に満ちたスタイルとは全く異なる。往時のロシア絵本の隆盛を知る者なら選びそうにない、新鮮さを欠いた古めかしい絵本なのだ。この選定に光吉が諸手を挙げて同意したとはどうしても思えないのである。<sup>(註32)</sup>

「岩波の子どもの本」が戦前のロシア絵本でなく、当時まさに世に出たばかりの近刊を選び出した理由は定かでないが、いくつかの推理が可能である。同シリーズには第二次大戦後に登場した海外の新しい絵本に加えて、長く光吉が愛してきたアメリカ絵本も選ばれたが、その場合（1938年刊の『金のニワトリ』を例外として）、『はなのすきなうし』（1936年）も、『みんなの世界』（1939年）も、また戦時中に出た『ちい

さいおうち』(1942年)も、すべて1950年代に入ってもアメリカで増刷を重ねる現役の人気絵本だった。選書基準の一つに「定評あるロングセラー」が意識されていたのは明らかだろう。

そうした観点からすると、スターリン体制下で全点が絶版になった1930年代初めのロシア絵本は、選考対象から外れてしまうことになる。岩波書店は当時、エージェントを通して版元と著作権者に邦訳の出版許可を求めており、たとえ戦前のロシア絵本の日本語版を刊行したくとも、ソ連側からは正規の許諾が得られなかったに違いない。どのみち、それらは「岩波の子どもの本」のラインナップに加わりようがなかったのだ。

もう一つ、考え得る理由としては、光吉自身のロシア絵本に対する認識の変化が挙げられる。先述したように、彼は1943年の時点で、かつて五カ年計画当時のソ連が国家主導で計画的に流布させた絵本に高い評価を与えていたが、それはあくまでも「非常時」すなわち厳しい出版統制がなされた戦時体制下ならではの特殊な見方であり、戦後に自由な出版活動が再開されると、目指すべき規範としてのロシア絵本の存在意義が急速に薄らいだのではないか。光吉文庫には1950年代以降のロシア絵本は1冊も見出されず、彼が戦後のソ連の児童書への興味を喪失していたことは明らかである。光吉にとって、戦時に国家主導の翼賛体制下で「日本少国民文化協会」に所属し、また東南アジアでの対外文化工作に関与した事実は、あまり触れてほしくない「不都合な真実」だったかもしれない、戦前のロシア絵本の存在はそうした忌まわしい過去の記憶とどこかで結びついていたのかもしれない。

1930年代の日本で一部の具眼の士をあれほど魅了したロシア絵本は、いかなる事情が背後にあったにせよ、「岩波の子どもの本」に組み込まれることなく終わった。その編集に深く関与した光吉夏弥も、シリーズ全体の装丁を担当した原弘も、ともにロシア絵本の熱心なコレクターであり、二人分を併せると100冊も架蔵していた事実を思うにつけ、かつて共有された情熱が次世代に継承されなかったのがつくづく悔やまれる。こうして、ロシア絵本の記憶は人々の脳裏から消え失せ、ほどなく幻の存在と化してしまうのである。

本稿は2022年3月26日に白百合女子大学児童文化研究センターが催した拙レクチャー「光吉文庫のロシア絵本について——コレクションの稀少性と歴史的意義」から、その核心をなす部分を抽出し、再構成して文章化したものである。「光吉文庫」に残された光吉夏弥旧蔵の貴重なロシア絵本の閲覧と調査を数度にわたりご許可くださり、講演と執筆の機会を与えていただいた同研究センターに深く御礼を申し上げます。図版のロシア絵本はすべて「光吉文庫」蔵書を撮影した。その他の書影は著者が架蔵するものである。

なお、調査の中間報告として2009年に執筆され、本稿の雛型ともなった以下の小文がある。

❖沼辺信一「光吉文庫のロシア絵本について」『白百合女子大学 児童文化研究センター報』36号、白百合女子大学児童文化研究センター、2009年7月、pp. 365-366 [pp. 1-2].

## 註

1. 展覧会「幻のロシア絵本 1920-30年代」は2004年2月から2005年12月まで、芦屋市立美術博物館、足利市立美術館、東京都庭園美術館、北海道立函館美術館、大分市美術館、下関市立美術館の六会場を巡回した。
2. 展覧会カタログ『幻のロシア絵本 1920-30年代』（淡交社、2004年）を参照。柳瀬正夢の旧蔵絵本は当初11冊（東京都現代美術館美術図書室「柳瀬文庫」蔵）だったが、その後ナウカ株式会社に残る8冊が新たに加わり、会期途中から全19冊が展示された。
3. 「新ニッポン童画会声明」（1932年）より。引用は上笙一郎「マニフェストふたつ」『児童文化史の森』大空社、1994年、pp. 378-380による。
4. 安泰と前島ともがロシア絵本から受けた影響については、沼辺信一「子どもの本が国境を越えるとき——ヨーロッパと日本におけるロシア絵本の受容」展覧会カタログ『幻のロシア絵本 1920-30年代』淡交社、2004年、pp. 176-177を参照。
5. 近年に発掘された松山文雄・前島とも旧蔵ロシア絵本については以下を参照。沼辺信一「松山文雄・前島とも夫妻と戦前のロシア絵本」『美術運動』148号、日本美術会、2021年3月、pp. 30-31.
6. 原弘「ソヴィエト絵本のある時代」『グラフィック デザイン』23号、ダイヤモンド

- ド社、1966年4月、p. 19.
7. 原弘「デザイナーの絵本」『グラフィック デザイン』1号、芸美出版社、1959年11月、p. 5.
  8. 松山文雄の回想（1971年）より。まつやまふみお／上笙一郎（対談）「童画と絵本——童画史から見た」『日本児童文学』臨時増刊号「絵本」、盛光社、1971年12月、p. 89.
  9. ナウカ社（第一期）の店舗の開業と廃業の時期については、宮本立江氏のご教示を得た。
  10. ナウカ社がいつロシア絵本の販売を開始したかは判然としないが、雑誌『新ロシア』『プロレタリア文学』所収の広告から、遅くとも創業半年後の1932年秋には店頭には並べられていた事実が判明する。ナウカ社で売られた絵本のすべてにシールが貼付されたわけではなく、むしろ別の場所での出張販売用に貼られたものらしい。ナウカ社と創設者の大竹博吉・せい夫妻がロシア絵本の移入に果たした役割については以下を参照。沼辺信一「初めて日本語になったロシア絵本 1920－30年代、児童書はどのように伝播したか」『ユーラシア研究』39号、ユーラシア研究所／東洋書店、2008年11月、pp. 35-37.
  11. 澤田精一『光吉夏弥 戦後絵本の源流』岩波書店、2021年、p. 26.
  12. 光吉文庫のロシア絵本と照合すると、吉原治良の旧蔵絵本（全87冊）との重複は26冊、原弘の旧蔵絵本（全39冊）との重複は9冊、柳瀬正夢の旧蔵絵本（全19冊）との重複は3冊、松山文雄・前島とも夫妻の旧蔵絵本（全33冊）との重複は4冊となる。一例を除き、いずれもエディションまで同一。光吉と原との間では共通する絵本が思いのほか少なく、両者の絵本の選び方にはあまり共通点は認められない。
  13. 寺島貞志のモスクワ滞在は1929年1～3月と1930年6～8月の二度に及んだ。展覧会カタログ『寺島貞志 青春のリアリズム展』（萬鉄五郎記念美術館、2012年）を参照。代表作にモスクワで描いた油彩肖像画《コムソモルカ》（1930年、板橋区立美術館）がある。
  14. 矢部友衛の訪ソについては、五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』（スカイドア、1995年）に詳しい。同書 pp. 777-788を参照。
  15. 日本に題材を得たロシア絵本『長い名前』の成立とレイフェルト、メクシンの貢献については以下を参照。沼辺信一「旅する絵本たち 一九二八・二九年——東京・モスクワ・オデッサをつなぐ人々」『窓』133号、ナウカ株式会社、2005年10月、pp. 34-42.
  16. 光吉が「絵本の世界」で用いた語「コンティニュイティ」の意味については以下

- を参照。遠藤知恵子「光吉夏弥の『コンティニューイティ』に関する考察」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』25号、2022年、pp. 115-133.
17. 光吉が1942年に翻訳刊行した3冊の児童書については、澤田精一『光吉夏弥 戦後絵本の源流』岩波書店、2021年、pp. 72-75を参照。
  18. 「外国の絵本」ページに図版が掲載された海外絵本25冊のうち、過半数の13冊をアメリカ製の絵本が占めており、光吉がヴィーゼ、ドーレア夫妻、アルツィバーシェフ、ポガニー夫妻を非アメリカ人に「偽装」してもなお、アメリカ絵本は9冊を数えた。
  19. 光吉夏弥「絵本の世界」『生活美術』3巻9号、アトリエ社、1943年9月、p. 47.
  20. 光吉の自宅は四谷区伝馬町（現在の東京都新宿区四谷1丁目あたり）にあり、ここで空襲に遭ったらしい。大切にしていたロフティング原作によるドイツの影絵絵本を戦災で焼いてしまった話が以下の文章に出てくる。光吉夏弥「岩波の子ども本（二）——その発行のころのことども」『月刊 絵本』1巻2号、盛光社、1973年6月、p. 113.
  21. 光吉夏弥「絵本の世界」p. 49. 引用箇所の「教へる絵本」は、原文では「數（数）へる繪本」だが、光吉文庫にある『生活美術』手沢本（M04204）の書き込みに従って訂正した。
  22. 光吉夏弥「絵本の世界」pp. 50-51. なお、引用箇所にも誤植があり、光吉文庫の手沢本の書き込みによれば、末尾から三つ目の段落文中の「原稿料」は「原稿」が正しい。
  23. 光吉の論考「絵本の世界」にはフランス絵本の話題が全く登場しないが、同誌「絵本特輯」ではそれを補完すべく、ジャン・セルズ「フランス児童絵本の復興」なる小論が訳載され、「パール・カストールのアルバム」やヴィルドラック作、ルグラン絵の『薔薇色の島』などが挿図入りで紹介された（翻訳者不明）。出典：Jean Selz, "La renaissance des livres d'enfants en France." *Arts et métiers graphiques*, no. 56, 1935.
  24. 編集者の鉄村大二が興した生活社の刊行になる安価な四銭絵本シリーズに関しては以下を参照。沼辺信一「子どもの本が国境を越えるとき——ヨーロッパと日本におけるロシア絵本の受容」p. 179.
  25. 光吉夏弥「大東亜少国民文化の建設（承前）」『少国民文化』日本少国民文化協会、1944年5月、p. 36.
  26. Ernestine Evans, "Russian Children and Their Books." *Asia*, Concord: Asia Magazine Inc., November 1931, pp. 686-691, 736-737. 執筆者アーネスティン・エヴァンズ（1889～1967）はアメリカの女性ジャーナリスト・編集者で、ソ連のタ

ス通信社アメリカ支局長ケネス・デュラント (Kenneth Durant) と結婚、同時代のソ連文化に詳しかった。

27. 一例を挙げると、光吉夏弥『現代の舞踊』（「岩波講座 世界文学」岩波書店、1932年）は薄冊ながら当時の世界の舞踊界を手際よく概観した好著だが、そこでは彼は自らの鑑賞体験に依拠せず、もっぱら客観的な記述に終始している。
28. 1930年代前半にロシア絵本と出逢い、いち早く論じた日本人には、ロシア文学者の中山省三郎（1904～1947）と児童文学者の高瀬嘉男（1901～1983）がいるが、彼らのロシア絵本コレクションは散逸してほとんど伝わらない。
29. 光吉夏弥「岩波の子どもの本（一）——その発行のころのことども」『月刊 絵本』1巻1号、盛光社、1973年5月、pp. 80-81.
30. 「岩波の子どもの本」および光吉夏弥の翻訳絵本に関する生駒幸子氏の論考には以下のものがある。  
「光吉夏弥研究（第1期）——〈岩波の子どもの本〉編集までの子どもの本に関わる仕事」『絵本学』11号、絵本学会、2009年  
「〈岩波の子どもの本〉出版の歴史的検証資料と光吉夏弥の業績（第2期）資料の研究」『絵本学』12号、絵本学会、2010年  
「日本絵本史における光吉夏弥の果たした役割——海外絵本の翻訳から評論へ」（博士論文）、甲南女子大学、2012年  
「光吉夏弥の絵本翻訳——絵本翻訳における“右開きタテ組み”をめぐる」『白百合女子大学児童文化研究センター論文集』16号、2013年  
「翻訳絵本の変遷についての考察——光吉夏弥の絵本翻訳の独自性」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』22号、2019年
31. 光吉夏弥「岩波の子どもの本（二）——その発行のころのことども」『月刊 絵本』1巻2号、盛光社、1973年6月、p. 113.
32. 絵本『どうぶつのこどもたち』に収められたマルシャーク作の3冊の絵本のうち、最後の『ばかなこねずみ Сказка о глупом мышонке』には、同じウラジーミル・レーベジェフが絵を描いた戦前の版（初版1928年）があり、「幻のロシア絵本 1920-30年代」に出品され、上質な覆刻版も刊行されたので、両者を比較すると興味深い。マルシャークの詩句はほぼ同一だが、レーベジェフの挿絵は別人のように異なっており、旧版は簡略化された色と形を駆使した斬新なスタイルを示す。こちらがもしも「岩波の子どもの本」の底本に採用されていたなら、ロシア絵本の第一印象は一変したことだろう。参照：サムイル・マルシャーク詩、ウラジーミル・レーベジェフ絵『おろかな子ねずみ』（「幻のロシア絵本」復刻シリーズ2）淡交社、2004年

## 謝辞

本稿を2019年に惜しくも逝去された河崎晃一氏の思い出に捧げる。

河崎氏は「幻のロシア絵本 1920-30年代」展の発案者であり、芦屋市立美術博物館の学芸課長として、実現に全力を尽くされた。その並々ならぬ情熱と行動力がなければ展覧会は成就せず、ロシア絵本の日本への伝播に関する研究も端緒につくことはなかっただろう。

本稿のための調査ならびに執筆にあたっては、以下の方々から格別のご高配と懇切なご教示を賜った。ここにご芳名を記して心からの謝意を表する次第である。

浅岡靖央（白百合女子大学）、石井直人（白百合女子大学）、酒井志麻（白百合女子大学）、遠藤知恵子（白百合女子大学児童文化研究センター）、松山晋作（まつやまふみお研究会）、澤田精一、八代華子、鴻野わか菜、宮本立江、平野恵美子、坂本淳子、成田順子、宮本菜生子、布川由美子、場生松友子（古本海ねこ）、矢下晃人（アルカディア書房）、佐藤真砂（古書日月堂）、村越史麻（古書リネン堂）、広瀬洋一（古書音羽館）

## 【附録】

白百合女子大学児童文化研究センター所蔵 光吉文庫

### 光吉夏弥旧蔵ロシア絵本リスト

沼辺信一／編

凡例：

- \* 光吉夏弥旧蔵のロシア絵本は全61冊だが、2点の重複があるため59種となる。以下はそれらを光吉文庫の整理番号順に書籍データを記し、簡略な解説を施したものである。
- \* 整理番号のほかに、暫定的に通し番号（01から59まで）を付した。
- \* 通し番号のあとに☆を付けた絵本（全7冊）は、光吉が寄稿した雑誌『生活美術』1943年9月号「絵本特輯」に図版が掲載されている。
- \* 同一の絵本が他の国内のコレクションにも残る場合はその旨を記載した。吉原治良の旧蔵絵本には「幻のロシア絵本 1920-30年代」展カタログ（2004年）での図版番号も付記した。

01

M13171

**Черная смородина**

**クロスグリ**

文：Л. Воронкова（リュボーフィ・ヴォロンコーワ Lyubov' Voronkova）

絵：Памятных（パミヤトヌイフ Pamyatnykh [=Nina Kashina]）

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 18.4×13.2 cm

200,000 copies

\* 子どもたちがクロスグリ（黒酸壘、ブラックカラント）の苗木を植える話。

M13172

**Телефон****電話**

文：K. Чуковский（コルネイ・チュコフスキー Kornej Chukovskij）

絵：K. Рудаков（コンスタンチン・ルダコーフ Konstantin Rudakov）

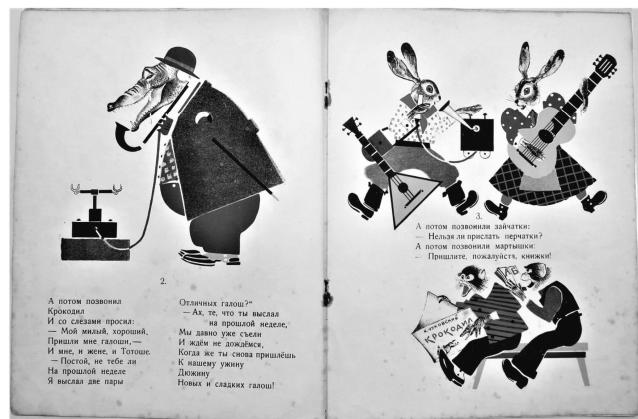
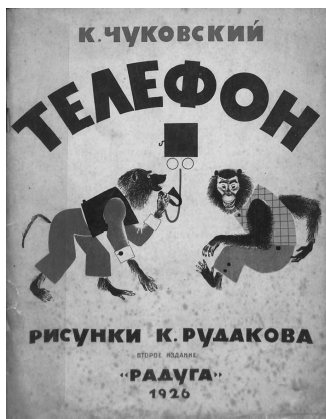
1926（第2版）

Ленинград/ Москва: “Радуга”

16pp. / 28.0×21.7 cm

8,000 copies

\* ドクトル・アイボリート（ロシア版ドリトル先生）と動物たちの愉快的交遊の物語。



『電話』表紙と見開き

M13173

**Наша книжка****私たちの本**

文：Ф. Н. Блехер（ファニヤ・ナウモフ・ヴァ・ブレヘル Fanya Naumovna Blekher）

絵：В. Баюскин, Л. Ушаков, С. Боим, Б. Суханов, С. Волуцкий. Л. Ушакова（バユスキン V. Bayuskin / ウシャコーフ L. Ushakov / ボイム S. Boim / スハーノフ B. Sukhanov / ヴォルツキー S. Volutskij / ウシャコーワ L. Ushakova の合作）

1932

Москва/ Ленинград: Учпедгиз

90 pp. / 16.5×26.2 cm

150,000 copies

\*切り抜いてカードにもなる学習絵本。13～14ページ欠落。日本ロシア語情報図書館（東京・経堂）も収蔵する。

04

M13174

**Рассказы об игрушках**

**おもちゃの話**

文：В. Смирнова（ヴェーラ・スミルノワ Vera Smirnova）

絵：Г. Ечеистов（ゲオルギー・エチエイストフ Georgij Echeistov）

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 28.3×22.1 cm

25,000 copies

\*おもちゃを手作りする工作絵本。吉原治良 [Cat. No. 59] も旧蔵。

05

M13175

**Мастер-ломастер**

**こわし名人**

文：С. Маршак（サムイル・マルシャーク Samuil Marshak）

絵：А. Пахомов（アレクセイ・パホーモフ Aleksej Pakhomov）

1930

Ленинград: ГИЗ

12 pp. / 19.2×14.9 cm

20,000 copies

\*木工作業が好きな少年を主人公とするマルシャーク&パホーモフの名作絵本。吉原治良 [Cat. No. 24]、原弘も旧蔵した（ただし1931年の第2版）。裏表紙の“Т. Терасима”と読めるペン書きサインから、プロレタリア画家の寺島貞志（1905～1983：1929年と1930年にモスクワ滞在）の旧蔵書とわかる。

06

M13176

**Я печатник**

**私は印刷工**

文・絵：Е. Зонненштраль, К. Кузнецов (E・ゾンネンシトラーリ E. Zonnenshtral' /  
コンスタンチン・クズネツォフ Konstantin Kuznetsov)

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 18.9×14.4 cm

50,000 copies

\* ステンシル技法を学ぶ絵本。一部に切り抜き欠落あり。吉原治良 [Cat. No. 69]、原弘も旧蔵。

07

M13177

**Звезды**

**星**

文：П. Жиганков (P・ジガンコフ P. Zhigankov)

絵：Д. Мельников (ドミートリー・メリニコフ Dmitrij Mel'nikov)

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 18.4×12.7 cm

200,000 copies

\* 天体観測とプラネタリウムについての絵本。北海道大学附属図書館の宮原晃一郎（北欧文学・児童文学者）文庫にも同じ版がある。

08

M13178

**Как построили город**

**どのように町を造ったか**

文：Э. Паперная (エステル・パペルナヤ Ester Papernaya)

絵：А. Порет, Л. Капустин (アリーサ・ポレート Alisa Poret / L・カプースチン  
L. Kapustin)

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 22.4×18.9 cm

40,000 copies

\* 近代的な都市計画を描いた絵本。吉原治良 [Cat. No. 161]、原弘も旧蔵。

09

M13179

**Будь готов к обороне**

**防衛の準備あれ**

文：И. Коршунов, А. Ноткина (イワン・コルシュノフ Ivan Korshunov / А・ノ  
トキナ A. Notkina)

絵：Г. Петрова (G・ペトローワ G. Petrova)

1931

Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 19.8×17.7 cm

50,000 copies

\* 子どもの遊びを通して国防意識を培う絵本。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 160]。同  
じ絵本がもう 1 冊あり (M13185)、エディションも同一。

10

M13180

**Октябрьский парад**

**十月のパレード**

文：С. Болотин (サムイル・ボローチン Samuil Bolotin)

絵：Б. Покровский (ボリス・ポクロフスキー Boris Pokrovskij)

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 24.4×17.0 cm

100,000 copies

\*「赤の広場」での革命記念日を描いた絵本。一部に切り抜き欠落あり。

11

M13181

**Джаник и Кирюша**

**ジャニクとキリューシャ**

文：Н. Шер（ナジェージダ・シェル Nadezhda Sher）

絵：А. Гончаров（アンドレイ・ゴンチャローフ Andrej Goncharov）

1932（第2版）

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 21.6×19.0 cm

25,000 copies

\*モスクワの少女と南国に住む少女の交友をこまやかに描く。吉原治良 [Cat. No. 113]、松山文雄も旧蔵。

12

M13182

**«Безбожник» No. 10**

**雑誌『無神論者』第10号**

表紙絵：М. Черемных（М・チェレムヌيوف M. Cheremnykh）

1932年5月31日

Ленинград/ Москва : Обл. советов союза воинствующих безбожников СССР

ОГИЗ – Государственное антирелигиозное Изд-во

20 pp. / 30.3×22.9 cm

200,000 copies

\*大人向けの反宗教プロパガンダ絵入り雑誌。表紙裏には「ナウカ書房」のシールを貼付。



雑誌『無神論者』に貼られた「ナウカ書房」シール

13

M13183

**Мельница**

**風車小屋**

文：М. Панков (М・パンコーフ M. Pankov)

絵：Б. Никифоров, Лидия Попова (B・ニキーフォロフ B. Nikiforov / リジヤ・ポ  
ポワ Lidiya Popova)

1932 (第2版)

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 18.3×13.1 cm

200,000 copies

\* 風車を手作りする工作絵本。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 62]。

14

M13184

**Страна дураков**

**阿呆者の国**

文：А. Лейферт, Я. Мексин (アンドレイ・レイフェルト Andrej Leifert / ヤコフ・  
メクシン Yakov Meksin)

絵：Д. Штеренберг (ダヴィード・シュテレンベルグ David Shterenberg)

1929

Москва: Государственное издательство

12 pp. / 19.7×14.7 cm

30,000 copies

\* 日本の昔話に取材した稀少な絵本。表紙に画家名「シテレンベルグ畫」と日本語で刷られている。上辺に画鋏の跡あり。同種の絵本『長い名前』（M13201）も参照のこと。

09bis

M13185

**Будь готов к обороне**

**防衛の準備あれ**

文：И. Коршунов, А. Ноткина（イワン・コルシュノフ Ivan Korshunov / А・ノトキナ A. Notkina）

絵：Г. Петрова（G・ペトローワ G. Petrova）

1931

Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 19.8×17.7 cm

50,000 copies

\* M13179と同じ絵本。エディションも同一。

15

M13186

**Октябрь**

**十月**

文・絵：作者多数

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

32 pp. + 表紙 / 29.0×22.6 cm

50,000 copies

\* 厚表紙の絵本。十月革命に因んだもの。原弘も旧蔵。

16

M13187

**Книжка-киносенс о том как пионер Ганс стачечный комитет спас**

**絵本 = 映画——ピオネールのガンスはいかにしてストライキ委員会を支援したか**

絵：Ф. Кобринец（フョードル・コブリネツ Fyodor Kobrinets）

構成：Исаак Эбериль（イサーク・エベリリ Isaak Eberil'）

1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 29.2×22.1 cm

50,000 copies

\* 映画フィルムのコマになぞらえた、文字のない「紙キネマ」絵本。原弘も旧蔵。

17

M13188

**Вчера и сегодня**

**昨日と今日**

文：С. Маршак（サムイル・マルシャーク Samuil Marshak）

絵：В. Лебедев（ウラジーミル・レーベジェフ Vladimir Lebedev）

1931（第5版）

Москва/ Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 28.7×22.0 cm

20,000 copies

\* マルシャーク & レーベジェフの代表作のひとつ。表紙裏に「ナウカ社」のシール貼付。吉原治良 [Cat. No. 9]、小西謙三も同じ第5版を旧蔵。

18

M13189

**Мойдодыр**

**しっかり洗え**

文：К. Чуковский（コルネイ・チュコフスキー Kornej Chukovskij）

絵：Ю. Анненков（ユーリー・アンネンコフ Yurij Annenkov）

1933 (第17版)

Ленинград/ Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

24 pp. + 表紙 / 28.6×21.2 cm

50,325 copies

\* チュコフスキーの物語による人気絵本。吉原治良も同じ第17版を旧蔵 [Cat. No. 51]。

19

M13190

**Наши тропики**

**私たちの熱帯**

文・絵：Л. Бруни (レフ・ブルーニ Lev Bruni)

1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

24 pp. / 18.8×14.5 cm

45,000 copies

\* 果実が豊かに実る色鮮やかな南国を描く。吉原治良 [Cat. No. 112]、松山文雄も旧蔵。

20

M13191

**Кто?**

**だあれ？**

文：А. Введенский (アレクサンドル・ヴヴェージェンスキー Aleksandr Vvedenskij)

絵：Л. Юдин (レフ・ユージン Lev Yudin)

1931 (第2版)

Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 22.9×19.1 cm

30,000 copies

\* 影絵を見ながら、いたずらの犯人探しをする絵本。8ページに切り抜き欠損あり。吉原治良 [Cat. No. 77]、柳瀬正夢も同じ第2版を旧蔵。



『だあれ?』表紙

21

M13192

**Железо**

**鉄**

文：М. Фроман（ミハイル・フローマン Mikhail Froman）

絵：М. Фогт（М・フォクト M. Fogt）

1926

Ленинград/ Москва: “Радуга”

12 pp. / 18.7×14.2 cm

30,000 copies

\*鉄の採掘から精錬までを解説。裏表紙のペン書きサイン“T. Yabe”から、前衛画家・プロレタリア画家の矢部友衛（1892～1981：1926～27年に訪ソ、帰国後「新ロシヤ展」を実現）旧蔵とわかる。

22

M13193

**Дети советов**

**ソ連の子どもたち**

文：Осип Колычев（オシップ・コリイチェフ Osip Kolychev）

絵：Е. Афанасьева, И. Кулешов (E・アフナーシエワ E. Afanas'eva / I・クレ  
ショフ I. Kuleshov)

1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 19.3×22.3 cm

50,000 copies

\* ソ連の子どもたちの生活を描いた絵本。柳瀬正夢も旧蔵。

23

M13194

**Зеленое золото**

**緑の金（燐灰石）**

文：С. Болотин (S・ボローチン S. Bolotin)

絵：Вадим Константинов (ワジム・コンスタンチーノフ Vadim Konstantinov)

1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

24 pp. / 18.9×22.3 cm

25,000 copies

\* シベリアでの燐灰石の採掘を描く。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 100]。同じ絵本が  
もう1冊あり (M13210)、エディションも同一。

番外

M13195

**И. Ершов: Русские народные сказки**

\* 絵本ではなく絵葉書セット (12枚)。収納ケース入り。エルショーフ『ロシア民  
話集』にちなむ (1967年、レニングラード製)。

24

M13196

**Юный политехник: Альбом, выпуск 4**

**若いポリテクニク：アルバム 第4集**

文：Н. Д. Беляков, В. П. Кардашев (N・D・ベリヤコフ N. D. Belyakov / V・P・  
カルダシェフ V. P. Kardashev)

1931

Москва/ Ленинград: ОГИЗ-ИЗОГИЗ

16 pp. / 18.2×26.3 cm

50,000 copies

\*子ども向け絵入り教材アルバム。日本ロシア語情報図書館（東京・経堂）の蔵書  
にもある。

25

M13197

**Дом где живут книги**

**本の住む家**

文：Е. Микини (Е・ミキーニ E. Mikini)

絵：А. Правдина (アンナ・プラヴジナ Anna Pravdina)

1932

Москва/ Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 25.5×18.0 cm

100,000 copies

\*読書の大切さを説いた「絵本についての絵本」。表紙裏に「ナウカ社」のシール  
貼付。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 71]。

26

M13198

**Давайте раскрашивать**

**ぬり絵をしよう**

文・絵：Николай Трошин, Ольга Дейнеко (ニコライ・トローシン Nikolaj Troshin /  
オリガ・デイネコ Ol'ga Dejneko)

1931

Москва: “Посредник”

16 pp. / 14.4×20.3 cm

20,000 copies

\*ぬり絵をしながら色彩について学ぶ絵本。表紙裏に「ナウカ社」のシール貼付。  
吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 67]。



『ぬり絵をしよう』表紙



表紙裏に貼られた「ナウカ社」シール

27

M13199

**Малыши и карандаши**

**子どもと鉛筆**

文・絵：А. Правдина (アンナ・プラヴジナ Anna Pravdina)

1933 (第2版)

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 18.0×12.8 cm

200,000 copies

\*色鉛筆で絵を描こうと誘う絵本。同じ版を吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 64]。

28

M13200

**Юный политехник: Альбом, выпуск 5**

**若いポリテクニック：アルバム 第5集**

文：Н. Д. Беляков, В. П. Кардашев (N・D・ベリャコフ N. D. Belyakov / V・P・カルダシェフ V. P. Kardashev)

1931

Москва/ Ленинград: ОГИЗ-ИЗОГИЗ

16 pp. / 18.6×27.0 cm

50,000 copies

\* 子ども向け絵入り教材アルバムの第5集。柳瀬正夢も旧蔵。

29

M13201

**Длинное имя**

**長い名前**

文：А. Лейферт, Я. Мексин（アンドレイ・レイフェルト Andrej Leifert／ヤコフ・メクシン Yakov Meksin）

絵：А. Могилевский（アレクサンドル・モギレフスキー Aleksandr Mogilevskij）

1929

Москва: ГИЗ

12 pp. / 197×146 cm

30,000 copies

\* 『阿呆者の国』（M13184）と同様、日本の民話による絵本。上辺に画鋏の跡があり、ページにはやや汚れが目立つ。

30 ☆

M13202

**Ерш**

**ヨールシ**

文・絵：С. Рахманин（セルゲイ・ラフマニン Sergej Rakhmanin）

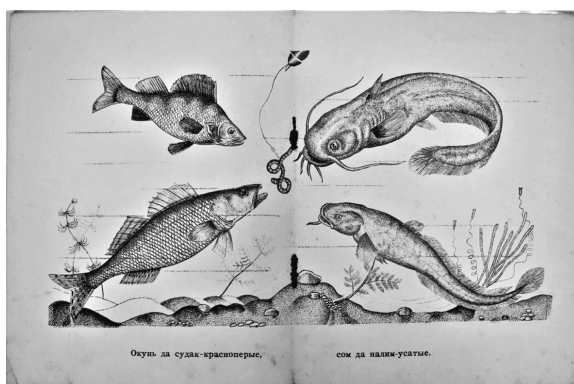
1926

Ленинград: “Радуга”

12 pp. / 19.2×14.8 cm

30,000 copies

\* 鱸（すずき）に似た淡水魚ヨールシ（英名 Ruffe）の生態を捉えた絵本。裏表紙に赤鉛筆で旧蔵者名（？）「染谷」の書き込み。



『ヨールシ』 見開き

31

M13203

**Детки-разноцветки**

**さまざまな色の子どもたち**

文：С. Полтавский（セミヨーン・ポルタフスキー Semyon Poltavskij）

絵：С. Чехонин（セルゲイ・チェホーニン Sergej Chekhonin）

1927

Москва: Земля и фабрика

[12 pp.] / 30.1 × 23.0 cm

10,000 copies

\* 表紙が失われ、本体 8 ページ分と裏表紙のみ残存。肌の色が異なる世界各地の子どもが友情を育む。[本書の同定は Evgeny Steiner, *Stories for Little Comrades* (1999) による。]

32

M13204

**Куks и кролики**

**ククスと兎たち**

文：Н. Кальма, С. Болотин（N・カリマ N. Kal'ma / S・ボローチン S. Bolotin）

絵：М. Синякова（マリヤ・シニャコーワ Mariya Sinyakova）

1933

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 25.9×18.0 cm

100,000 copies

\*子どもたちが兎を育てる物語。

33

M13205

**Цветные задачи**

**色の課題**

文・絵：К. Ломовицкий (K・ロモヴィツキー K. Lomovitskij)

1931

Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 11.3×14.5 cm

30,000 copies

\*色の塗り方や混色を実例から学ぶ絵本。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 66]。

34

M13206

**Лесенка**

**はしご**

文：Е. Шабат (E・シャーバト E. Shabat)

絵：Н. Кашина (ニーナ・カーシナ Nina Kashina)

1931 (第2版)

Москва/ Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 15.6×13.1 cm

200,000 copies

\*梯子を題材に、日常から知識を得る遊び絵本。吉原治良も同じ版を旧蔵 [Cat. No. 36]。

番外

M13207

\* マルシャーク & レーベジェフの傑作絵本『サーカス Цирк』（1925年）の覆刻版（Москва, 1975）。

35

M13208

**Мои игрушки**

**私のおもちゃ**

絵：Д. Штеренберг（ダヴィード・シュテレンベルグ David Shterenberg）

1930

Москва/ Ленинград: Государственное издательство

12 pp. / 22.2×19.1 cm

10,000 copies

\* 文字のない絵本。独特のスタイルの絵で、さまざまな民衆玩具を紹介する。

36

M13209

**Монголия**

**モンゴル**

文：Ф. Федотов（F・フェドートフ F. Fedotov）

絵：Т. Звонарева（タチヤーナ・ズヴォナリョーワ Tat'yana Zvonareva）

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 22.0×19.3 cm

50,000 copies

\* 写実的に描き出されたモンゴル民衆の生活。表紙裏に「ナウカ社」のシール貼付。吉原治良 [Cat. No. 125]、松山文雄も旧蔵。

23bis

M13210

**Зеленое золото**

**緑の金（燐灰石）**

文：С. Болотин (S・ボローチン S. Bolotin)

絵：Вадим Константинов (ワジム・コンスタンチーノフ Vadim Konstantinov)

1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

24 pp. / 18.9×22.3 cm

25,000 copies

\* M13194と同じ絵本。エディションも同一。表紙裏に「ナウカ社」のシール貼付。  
吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 100]。

37

M13211

**Конопель-конопелька**

**麻**

文：Иван Новиков (イワン・ノーヴィコフ Ivan Novikov)

絵：П. Павлинов (パーヴェル・パヴリノフ Pavel Pavlinov)

1926

Москва/ Ленинград: Государственное издательство

36 pp. / 21.8×17.1 cm

10,200 copies

\* 種蒔きから収穫、麻縄織いまで、植物の麻について知る絵本。

38 ☆

M13212

**Путешествие в Батум**

**バトゥームへの旅**

文：А. Введенский (アレクサンドル・ヴヴェージェンスキー Aleksandr Vvedenskij)

絵：Т. Глебова (タチヤーナ・グレーボワ Tat'yana Glebova)

1931

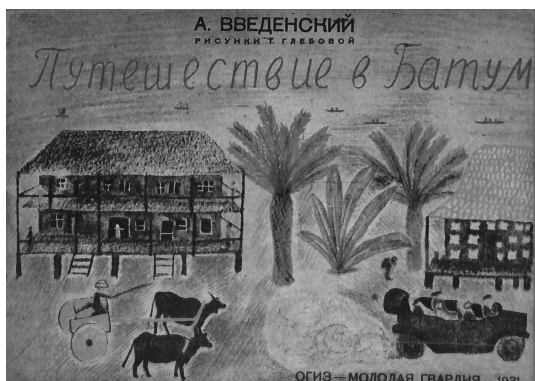
Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 12.1×16.8 cm

50,000 copies

\* 黒海沿岸の町バトゥームへの旅を描いた異国情緒に満ちた絵本。裏表紙にゴム印

で「¥0.30」とある。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 115]。



『バトゥームへの旅』表紙

39

M13213

«Мурзилка» Октябрь 1930 г

Ежемесячный детский журнал, “Рабочей газеты”

『ムルзилカ』1930年10月号

1930

Москва [?]

32 pp. / 23.5×17.7 cm

刊行部数記載なし

\*絵入りの月刊子ども雑誌。

40

M13214

Галу и М'гату: Негритянские ребята

ガルとムガトゥ：黒人の子どもたち

文：О. Гурьян（オリガ・グリヤン Ol'ga Gur'yan）

絵：Д. Штеренберг（ダヴィード・シュテレンベルグ David Shterenberg）

1930（第2版）

Москва：Государственное издательство

12 pp. / 22.2×18.9 cm

10,000 copies

\* アフリカの二人の子どもを主人公とする物語絵本。上辺に画鋏の跡あり。



『ガルとムガトウ』表紙

41

M13215

**Кросс**

**クロスカントリー**

文・絵：П. Новиков (P・ノーヴィコフ P. Novikov)

1932

Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 accordion-fold pp. / 15.1 × 19.5 cm

50,000 copies

\* 戸外でのクロスカントリー競技を折り本形式で展開。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 41]。

42

M13216

**Шесть масок**

**六つの仮面**

文・絵：В. Ермолаева (ヴェーラ・エルモラーエワ Vera Ermolaeva)

1930 (第2版)

Ленинград: Государственное издательство

12 pp. / 19.5×22.8 cm

25,000 copies

\* 絵本から図柄を鋏で切り取り、手を加えて仮面に仕上げる「切り抜き絵本」。

43 ☆

M13217

**Болотные птицы**

**沼の鳥**

文：Лесник（レスニーク Lesnik）

絵：Н. Коган（ニーナ・コーガン Nina Kogan）

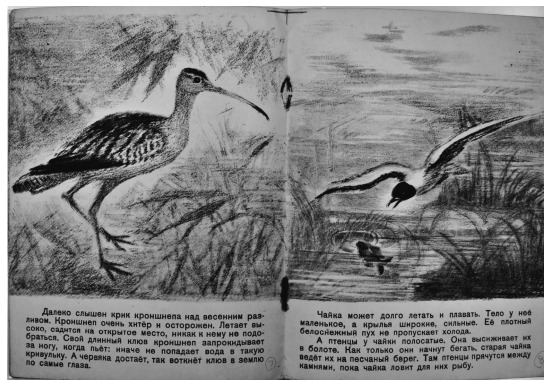
1931

Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 19.3×14.7 cm

25,000 copies

\* 淡い色調で湖沼の鳥たちの生態を描く。各ページに鉛筆で数字。吉原治良も旧蔵  
[Cat. No. 131]。



『沼の鳥』 見開き

44

M13218

**Две Ирки**

**二人のイルカ**

文：И. Загряцкова（イリーナ・ザグリャツコワ Irina Zagryatskova）

絵：А. Брей（アンドレイ・ブレイ Andrej Brej）

1932（第2版）

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 18.3×12.9 cm

200,000 copies

\*少女イルカと、都会に連れて来られた同名の猿をめぐる物語。3、4ページに切り抜き欠損あり。

45

M13219

**Колхозная весна**

**コルホーズの春**

文：З. Александрова（ジナイーダ・アレクサンドロワ Zinaida Aleksandrova）

絵：А. Лаптев（アレクセイ・ラプチョフ Aleksej Laptev）

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 21.7×18.8 cm

50,000 copies

\*春の集団農場を舞台に、トラクターが総出で畑を耕す様子を描く。

46 ☆

M13220

**Зимою и летом**

**冬と夏**

文：Лесник（レスニーク Lesnik）

絵：Н. Коган（ニーナ・コーガン Nina Kogan）

1931

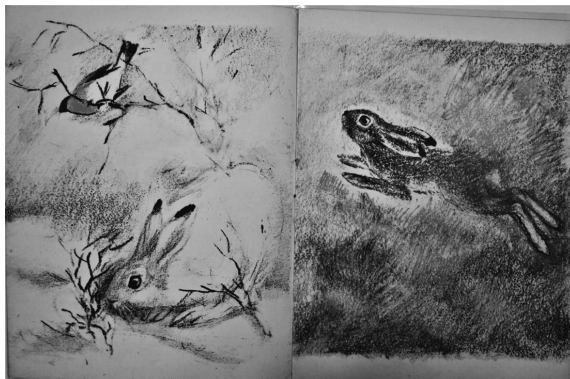
Ленинград: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 18.9×14.6 cm

50,000 copies

\*冬と夏で体毛の色を変える動物を対比的に描いた絵本。表紙裏に「ナウカ社」の

シール貼付。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 130]。



『冬と夏』 見開き

47

M13221

**Песенки**

**歌**

文：Л. Веприцкая（リュドミラ・ヴェプリツカヤ Lyudmila Vepritskaya）

絵：В. Конашевич（ウラジーミル・コナシェーヴィチ Vladimir Konashevich）

1929

Москва: Государственное издательство

12 pp. / 19.3×15.0 cm

10,000 copies

\* ヴェプリツカヤの詩にコナシェーヴィチが絵を添えた絵本。裏表紙のペン書きサイン “Т. Терасима” から画家の寺島貞志（1905～1983：1929年と1930年にモスクワ滞在）の旧蔵書とわかる。

48

M13222

**Бегать прыгать**

**走る、跳ぶ**

文：А. Введенский（アレクサンドル・ヴヴェジェンスキー Aleksandr Vvedenskij）

絵：В. Ермолаева（ヴェーラ・エルモラーエワ Vera Ermolaeva）

1930

Ленинград: Государственное издательство

12 pp. / 19.8×14.7 cm

10,000 copies

\* ヴェジェンスキーの詩にエルモラーエワが絵を添えたスポーツ絵本。縦長の判型を横倒しにして展開される。

49

M13223

**Парад красной армии**

**赤軍のパレード**

絵：А. Дейнека（アレクサンドル・デイネカ Aleksandr Dejneka）

1930

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 22.5×19.5 cm

35,000 copies

\* 文字のない絵本。革命記念日にモスクワ「赤の広場」で行われるパレードを描く。

50

M13224

**Май**

**五月**

文：Агния Барто（アグニヤ・バルトー Agniya Barto）ほか

絵：Алексей Лаптев（アレクセイ・ラブチェフ Aleksej Laptev）ほか

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

12 pp. / 22.0×19.2 cm

20,000 copies

\* 子どもたちのメーデー参加を描いた、多くの作者による合作絵本。吉原治良 [Cat. No. 150]、原弘も旧蔵。

M13225

**В облаках****雲のなかで**

文・絵：А. Дейнека（アレクサンドル・デイネカ Aleksandr Dejneka）

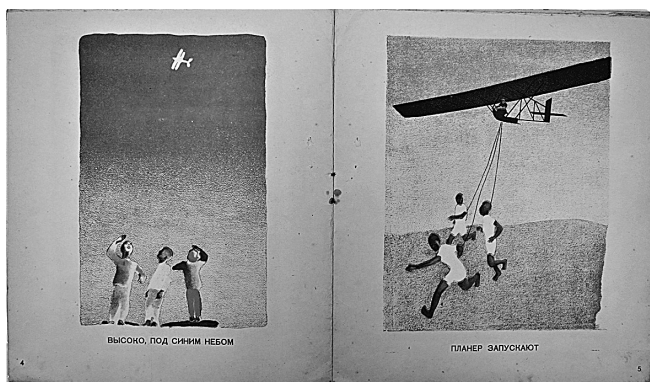
1930

Москва: Государственное издательство

12 pp. / 22.5×19.4 cm

35,000 copies

\* 空と飛行機への子どもたちの憧れを描く。短文を添えた絵のみで展開。



『雲のなかで』 見開き

M13226

**Северный май****北の五月**

文：Мих. Рудерман（ミハイル・ルデルマン Mikhail Ruderman）

絵：А. Боровская, Л. Елисеевнина（アンナ・ボロフスカヤ Anna Borovskaya /  
L・エリセーエヴニナヤ L. Eliseevninaya）

1933

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 22.1×19.2 cm

50,000 copies

\*シベリアの氷原を舞台とする「北の絵本」。吉原治良も旧蔵 [Cat. No. 109]。

53

M13227

**Жучки**

**虫**

文：М. Зарницына（マリヤ・ザルニツィナ Mariya Zarnitsyna）

絵：М. Шарвинска（М・シャルヴィンスカ M. Sharvinska）

1928

Москва : Государственное издательство

16 pp. / 22.3×18.8 cm

15,000 copies

\*黒と褐色の二色刷の動物絵本。裏表紙のペン書きサイン“Т. Терасима”から画家の寺島貞志（1905～1983：1929年と1930年にモスクワ滞在）の旧蔵書とわかる。

54

M13228

**Даргавское ущелье**

**ダルガフスキー峡谷**

文：В. Поливанов（V・ポリヴァノフ V. Polivanov）

絵：В. Константинова（V・コンスタンチーノワ V. Konstantinova）

1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

32 pp. と表紙 / 21.5×17.4 cm

25,300 copies

\*北オセチアの峡谷をめぐる読物。モノクロ挿絵。表紙裏に「ナウカ書房」のシール貼付。

55

M13229

**День на линкоре**

## 戦艦の一日

文：Пётр Гаврилов（ピョートル・ガヴリーロフ Pyotr Gavrilov）

写真：В. Поляков（V・ポリャコフ V. Polyakov）

構成：Л. Юркович（L・ユルコーヴィチ L. Yurkovich）

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

48 pp. と表紙 / 16.3×21.8 cm

50,300 copies

\* 水兵の一日を描いた読物ふうの写真絵本。モノクロ印刷。

56

M13230

## Ноги

### 足

絵：С. Рахманин（セルゲイ・ラフマニン Sergej Rakhmanin）

n. d. (1926)

Ленинград: “Радуга”

12 pp. / 19.3×14.8 cm

30,000 copies

\* さまざまな動物の足（脚）についての絵本。

57

M13231

## Цеппелин

### ツェッペリン

文：Л. Кассиль（レフ・カッシリ Lev Kassil'）

絵：Ф. Кондратов（フョードル・コンドラトフ Fyodor Kondratov）

1931（第2版）

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 15.3×13.2 cm

200,000 copies

\* 街の上空に現れた飛行船をめぐる絵本。吉原治良 [Cat. No. 42]、原弘も同じ版

を旧蔵。

58 ☆

M13232

### Автобус Москва

#### モスクワの乗合バス

文：Борис Черный (ボリス・チョールヌイ Boris Chernyi)

絵：Михаил Гуревич (ミハイル・グレーヴィチ Mikhail Gurevich)

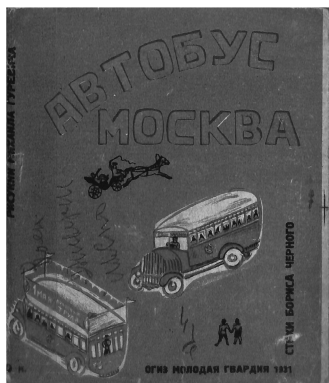
1931

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

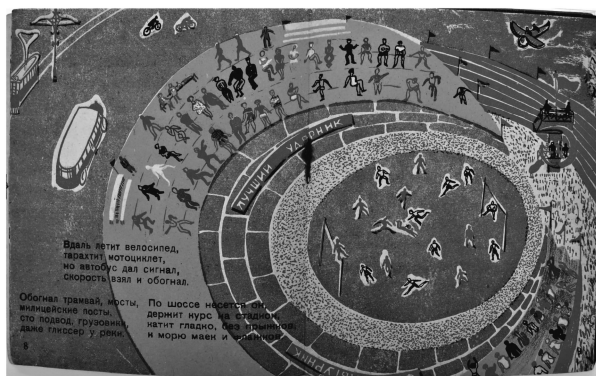
16 pp. / 15.5×13.3 cm

200,000 copies

\* モスクワを走る乗合バスが各所をめぐる市内見物の絵本。原弘も旧蔵。表紙に落書き。



『モスクワの乗合バス』表紙



見開き

59

M13233

### Наш смотр

#### 私たちの発表会

絵：П. Фрейберг (パウラ・フレイベルグ Paula Frejberg)

1932

Москва: ОГИЗ “Молодая гвардия”

16 pp. / 28.7×22.7 cm

10,000 copies

\* 革命記念日に向けて工作に励む子どもたちを描く。原弘、松山文雄も旧蔵。

総計	61冊 (59種)
刊行年別	1920年代 10冊
	1930年 8冊
	1931年 20冊
	1932年 19冊
	1933年 4冊
『生活美術』絵本特輯（1943年9月）図版掲載	7冊（☆印）
「ナウカ社」「ナウカ書房」のシール貼付本	8冊
旧蔵者名が書き込まれた本	5冊
❖寺島貞志 3冊／矢部友衛 1冊／染谷（？）	1冊
吉原治良旧蔵本（87冊）との重複	26冊
原弘旧蔵本（39冊）との重複	9冊
松山文雄・前島とも旧蔵本（33冊）との重複	4冊
柳瀬正夢旧蔵本（19冊）との重複	3冊